

末黒野

の ぐ ぐ す

9月号 (通巻853号)



梔子の花

松本三千夫

日を楽しみ風を愉しみ今年竹
ほととぎす利鎌のごとき月上げて
風の丘潮の香の丘星涼し
小芥子の眼もの言ひたげや明易き
麦秋や真水のごとく空清く
花菖蒲城址の風のやや粗く
鎌倉五山一位紫陽花白百花
客何ぞ重き枷負ふ蝸牛
くちなしの香の饒舌や花錆びて
潤みたる麦熟れ星や岬鼻
万緑樽河合じき様の中や流離の心秘め
詩姉逝樽河合じき様けり鈴蘭の香を風攫ひ

祭鯉

小満のゆらりゆるりど朝の波
今年竹吹かれて丈を伸ばしけり
明日雨の予報出てをり花菖蒲
濃あぢさゐ箱根八里は雨のなか
手に汲める清水やゆるる生命線
山若葉潮を分けゆく船迅き
住みつきて十薬もまた庭の花
子等のきて魚板を打てり梅雨晴間
宮参りの赤子抱く父若楓
大寺の厚き軒反る薄暑かな
音程を合はす笛の音祭鯉
窯跡に風の自在や青大将

黒滝志麻子

(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

柿若葉

森清信子

嶺みねの大きく見ゆる春野かな
潮風を孕みて百の鯉幟
白きもの真白く乾き柿若葉
辰雄忌や紫淡きクレマチス
万緑の底のみづうみ雲一朶
木道の際に倒木遠閑古
夕映えの高原の牧ほととぎす
木洩日や抹茶頂く滝見茶屋
郭公や桐の木蔭のレストラン
出港の航跡太し薔薇の園
十葉の妖しき光夜の散歩

心太

安斎久英



競ひなし江戸肥後系の花菖蒲
万緑や中天統ぶる鳶の舞
風鈴の夕風誘ふ音色かな
時の日やソーラー時計狂ひ無く
杣の道尽きたる畔の二輪草
空耳にあらず降りつぐ竹落葉
沖望む木椅子にしばしほととぎす
梅雨寒や生くる辛さを時として
万緑やくの字への字に男坂
目くばせの以心伝心心心太
池の面に水輪広ぐる走り梅雨

青大将

石黒興平

隠沼に迫り出す木々や懸り藤
リラ冷えや窓かうかうと警察署
雲の無き立夏の空となりにけり
どう見てもこちら見てゐる青大将
くちなはや鎮守の杜の閑けさに
一村の護り神めき青大将
蛇往ぬや生臭き風そのままに
展帆や帆桁に揃ふ夏帽子
海光の溢るる駅や風薫る
更衣昨日と違ふ風に会ふ
翡翠に思はず声をひそめけり

地曳網

田中臥石

舌鳴らしけか蛤の潮汁
短夜の稿半ばなり妻寝落ち
カトレアの花文机を明るうす
植田凧ぎ新幹線の旅三日
ははの忌や梅雨入りの蔵王近く見え
空に浮く月山夏の雪光り
沢瀉やむかし水甕庭に据ゑ
地曳網引張り賃の鯨五尾
出刃包丁音符のごとく鯨叩く
水飲めと言ふ炎昼のバイト妻
養老の谷まつさらな沙羅の花

夏 燕

森 清 堯

ミサの樂洩るる山手やクレマチス
杣道の小さき日溜り九輪草
樟若葉大空隠し日を零し
輕鼻の子の五羽のよりそひ杭の上
プリンセスミチコ諾ふ薔薇深紅
薔薇の香に倦みて離れぬ薔薇の門
木道の木の香水の香水芭蕉
崖裾の沼の昏さや花菖蒲
夏燕ダム放流の飛沫縫ひ
夕さりの山並に活き五月富士
重さうに山気まとひ来黒揚羽



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



夏ひばり

吉田きみえ

丘畑の風の夕づき夏ひばり
彩りや朝日に映ゆる花菖蒲
青葉風麓の池の照りかげり
郭公の餅や溪の水光り
紫陽花を活けて客待つ昼下り
老鶯や風のやはらぐ散歩道
竹林の洩れ日ひとすぢ苔の花

いらご崎

今村千年

鳥引きて鳶の自在やいらご岬
潮騒の島へ一艘明易し
椰子の実の寄せし渚や花とべら
万葉の海に揺蕩ふ藻刈舟
振り向けば振り向きてをり菖蒲園
手移しの稚に薫風貫ひけり
更衣妻の好みに逆らはず

夏 燕

岡田史女

招かるる喜の字の祝初鯉
うぶすなの湯屋の軒先夏燕
子燕や造り酒屋の店先に
うしろ手の人へ躓きゆく遠郭公
薫風やキャッチボールの父と子に
その先は通行止めや立葵
人寄り来黄花ばかりの睡蓮に

麦の秋 岡野里子

きらめきて膨らむ小川濃山吹
山清水泥田にひかり注ぎけり
黄あやめや泥田の畦をトラクタ
万緑や乾ききつたる細小川
山裾を風渡りけり麦の秋
潜水艦浮かぶ港やばら香り
軍艦の勇姿残る碑紅さうび

勲章 小田嶋野笛

芭蕉句碑一平米の麦の秋
更衣我が身の角の未だとれず
手に残る肝斑は勲章更衣
単衣着てひらりと街へひとりもの
一馬身つけてゴールや風薫る
薔薇咲いて人憎むこと忘れけり
父の日の父より継がぬもの数多

水馬 加藤静江

編笠と赤きたすきや花摘女
名苑の堰や群れなす水馬
鐘楼の屋根を越したり今年竹
早苗田のさざ波の立ち雨意の風
生き生きと揃ひてなびく植田かな
薔薇園に憩ふ一日や海たひら
草取や名もなき小花残しゐて

茶白岳 菅野日出子

茶白岳指呼に燃え立つ山つつじ
夏燕ちりめん波のダムかすめ
山巒に残る雪溪空の青
畳なはる那須連山やほととぎす
累々と牧草ロール風薫り
田植機のひびく泥田や老一人
江戸切子の紫紺きらめく吟醸酒

青炎集

松本三千夫選

横浜 岩上行雄

つと出る手垣根越しなるさくらんぼ

甕の目高はじめて覗く児ら黙し

馴染みたる麦稗帽子共に古り

苺摘み年を当て合ふ児と爺

座すのみで庭の主やひきがへる

実梅落つ無常迅速とはいへど

横浜 佐藤喬風

田草取り暫しを立ちて叩く腰

抜き足の座敷わらしか芥子坊主

長々と馬の尿や代田搔

咄家の扇子は煙管夏羽織

水神の大蛇の渡る千枚田

今朝付きしけもの歯形椎新樹

町田 伴秋草

新茶酌む一服二服この至福

我が胸は未だ青春青き梅

大瑠璃のはたと鳴き止む静寂かな

鴉声さへ明るく響く梅雨晴間

夜もすがら軽ざ馴染まぬ夏布団

勝ち語る皓齒の球児日焼して

横浜 鍋島武彦

つと蛇の池を通りぬ称名寺

賑はひに遠き古刹や苔の花

船旅や舳先に仰ぐ五月富士

時の日やいつも出会へるサラリーマン

遠雷やあれこれ迷ふ外出着

一雄師と熟寝なされよ藤寝椅子

神河合と家藤

横浜 上月智子

駅弁の酢の味立ちぬ夏隣

子の声の光となる立夏かな

谷風と子の声孕み鯉のぼり

番傘の福の筆文字白牡丹

なかなかの開かぬ踏切夕薄暑

半泣きの子を送る母桜の実

横浜 遠藤清子

濃く淡く芽吹く里山谷戸日和

味まろき南部鉄瓶新茶酌む

総身の威嚇の構へ赤手蟹

日矢差すや項打ちたる青時雨

ママ友の四方山話黒日傘

参道を掃く竹箒音涼し

横浜 小野弘正

新緑の乙女稲荷や根津神社

川風や横一線の鯉のぼり

ばら園の一期一会の野点かな

焼酎や二万歩あとの胃へ速き

裾さばききりりと白き日傘かな

グラウンドの子らの未来や雲の峰

横浜 長尾タイ

伽羅露や猪口に溢るる越の酒

由比ヶ浜声を一つにポート漕ぐ

ひらがなの光の迷路恋蛩

爺の売るほまちの胡瓜みづみづし

古民家の琴の音色や土間涼し

滴りて千の支流の千曲川

横浜 山崎稔子

ふるさとの空遥かなり桐の花

汐の香を総身に纏ふ薄暑かな

カリヨンの告ぐる亭午や薔薇の園

紅白黄わけても真紅ばらの花

鳥の影実生の枇杷の色付きて

日を返す枇杷の産毛や遠汽笛

横浜 太田良一

サーファアの空へ飛びだす勢ひかな

江の島に若い海あり夏つばめ

浅草や畳の似合ふどぜう鍋

峰雲に託す未刊の詩集かな

夕風や海をかもめの聖地とし

緒を固く締むる武者像雲の峰

耕 土 集

黒滝志麻子選



五月来ぬ長蛇の列の行楽地 横 浜 高橋 正江

サングラス予防に変はる年となり

ざわざわと風切る音や青芒

樹も草も光り輝く梅雨の晴

白鷺の映る川面や魚跳ぬる

下校児の屈む小径や蟻の列 横 浜 松橋 輝子

百の礎登る古刹や青葉闇

万緑に黙す古刹や池澱み

仕付芋のままなる妣の夏衣

父の日の子よりジーンズ喜寿の夫

携帯が我を支へる梅雨籠り 横 浜 石田 朝子

豆飯や遺影の逸話盡きなくて

首筋に涼しき風や更衣

七夕や老も幼なも一行詩

何はともミニマリストや梅雨明けぬ

霧やキリンの大き眼に涙 横 浜 是松 三雄

道東の地平線まで耕され

青空を倍に広ぐる代田かな

目の縁に蠅遊ばせて牧の牛

夏めきてライブへコイン蟬丸忌

十葉はみな天を恋ひ森の間 川 崎 堀江 久子

カーテンの風の戦ぎよ夏来る

枇杷熟れて少女の両手ずつしりと

雨上がる相模の海に太き虹

夏至近し木洩れ日の影丸くして

煙草屋は自販機任せさみだるる 横 浜 塩川 君子

校服の白のまぶしき更衣

気にかかる空家の門扉バラ咲けり

脳トレの麻雀終へて新茶汲む

飛ぶものの声満つる森梅雨晴間

桜の実

小川 玉泉

(名誉顧問)

朝な朝な掃く紫の桜の実
梅雨の冷え忘れて拍手イルカショー
とんとんと下屋歩く音梅雨鳥
梅雨夕焼け声はづまする雀どち
ぴちぴちと跳ね水槽の囚鮎
釘一本使はぬ木橋河鹿の瀬

雑記帳 3

隣家との地境に我が家の山桜がある。樹齡は七十年を越えている。花の後、五ミリほどの実を結び、濃い紫に熟れると、足の踏み場もない位に落ちる。柔軟体操の一助と掃く朝の作業。